

図書館員による情報リテラシー教育の支援
：質問紙の分析による評価

Librarians with Information Literacy Education
: Evaluation based on analysis of questionnaire papers

附属図書館医学部分館
Nagoya University Medical Library

安井裕美子
YASUI, Yumiko

Abstract

Librarians of Nagoya University Medical Library have supported information Literacy Education course of the Medical School since 1985. The course name is "Basic training: Document retrieval".

According to the result of questionnaire papers by students in 2003, the course is useful. The other side, some students pointed out some problems. Those problems make librarians try to improve the course.

In this article, result of the questionnaire papers of 2003 was compared with the 2004 to verify the effect of improvement. According to the result of analysis, dramatically effects are not found out. However, almost students are as satisfied as students of 2003.

Beside, not only the evaluation by the students but also objective evaluations are necessary in the future.

1. 背景と目的

名古屋大学大学院医学系研究科では、文献検索技能の習得を目的とした科目が1985年度から開設されている。数回の名称変更を経て、現在は「大学院「基盤医科学実習」：文献検索」（以下、本実習と称す）とされており、認定される単位数は0.5単位である。

実習の責任者は名古屋大学附属図書館医学部分館長であるが、文献検索や二次情報データベースの検索は図書館職員の専門的職務のひとつであることから、開講当初より積極的に関与してきた。

当初は、Index Medicus や医学中央雑誌などといった紙媒体のデータベースに関して講義・実習を行っていた。しかし名古屋大学において、徐々にデジタル化されたデータベースが導入されたことに同調して、CD-ROM 検索やオンライン検索といったコンピュータ検索の占める割合が次第に高くなった。現在、本実習で扱うデータベースのほとんどがオンライン検索であり、紙媒体のデータベースに関しては、参考までに言及する程度である。

コンピュータ検索が主流になって以来、2002年

度までは、講義と実習を別々に実施してきた。これは、多人数の実習を可能とする施設が名古屋大学大学院医学研究科の存在する鶴舞キャンパスにはなく、医学部分館で利用者の情報検索用に提供されているパーソナルコンピュータ（PC）を一時的に流用して、実習を実施してきたことによる。

2003年度に、鶴舞キャンパスに情報メディア教育センターのサテライトラボが設置されたことにより、最大52名の実習を同時に行うことが可能となった。しかし2003年度の本実習の企画段階（2004年4月から6月上旬）においては、サテライトラボの装備が完了しておらず、全行程の取行が可能であるのか不明であったため、講義は例年通りに大講義室で一斉に行い、実習はサテライトラボで行う、折衷の方式を採用した。本誌の第2号¹⁾では、その様子を詳述し、受講者を対象とした質問紙の集計結果の分析を通して、受講者による本実習の評価と問題点とを明らかにした。それによると、受講者から幾つかの問題点が指摘されたが、本実習全体としては概して好評であった。2004年度の本実習においては、その結果を基に、本実習の受講環境および内容の改善を目指した。

本稿では、2004年度の実施状況を詳述し、2003年度と同様に質問紙の結果を分析することにより、受講者の本実習への評価と問題点とを明らかにする。また、2003年度の分析結果と比較することにより、改善目標の達成状況を検証する。

2. 本実習の問題点とその改善

2.1 本実習の問題点と改善のプロセス

図1は、2003年度から2004年度に渡る、本実習の改善のプロセスを図示したものである。

2003年度の質問紙から受講者による本実習への評価を得て、それを分析し、協力者の意見を加えて、問題点を自覚する。それを受けて、本実習をどのように改善するのか、その目的と方法を決定する。それに基づいて2004年度の本実習を行い、2003年度と同様に評価を行う。2003年度と2004年度の受講者からの評価を比較することにより、改善の効果を知ることができる。そしてまた、次年度へのフィードバックを行う。

ただし、受講者からの評価や協力者の意見は主観的なものであり、複数の年度に渡る受講者からの評価の比較は、相対的なものである。従って、

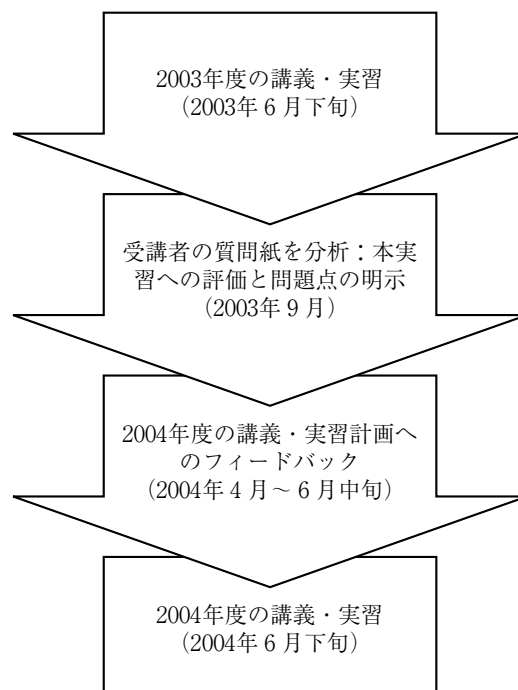


図1 2003年度から2004年度に渡る改善のプロセス

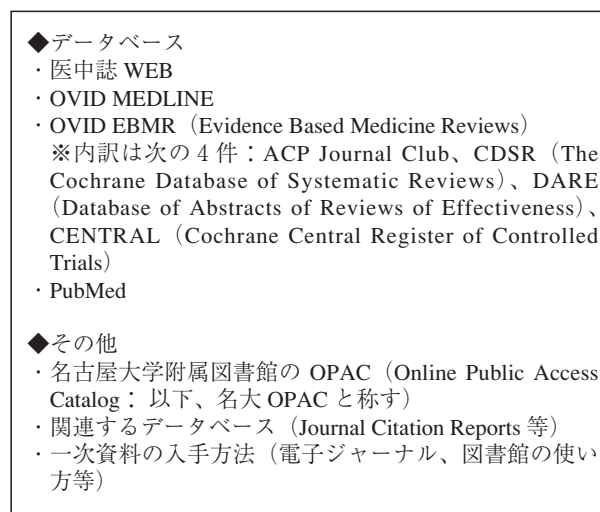


図2 2003年度の講義・実習の対象

この手法においては、絶対的な評価や客観的な評価が欠落していることになる。

最初に、2003年度における本実習について、簡単に述べる。図2は、2003年度の本実習の対象となった二次情報データベースである。PubMedのように一般的に利用できる二次情報データベースや、OVIDのように名古屋大学が契約している二次情報データベースの中で、医学系の大学院生の研究に有用であると判断したものを本実習の対象

- ◆受講環境に関すること
 - ・講義と実習を同時進行させるべきである
- ◆実習の内容に関すること
 - ・短期間では習得が困難である (OVID EBMR、OVID MEDLINE)
 - ・研究には必要ではないため興味を持ってない (OVID EBMR、OVID MEDLINE、医中誌WEB)
 - ・様々なレベルの受講者に対処しきれていない部分がある

図3 2003年度に指摘された問題点

- (1) 受講環境の改善
- (2) 各受講者のレベルに合わせた例題の提示
- (3) PubMedの重点化
- (4) 情報検索理論の教授

図4 2004年度：改善のポイント

としている。

本実習の終了後に、受講者に質問紙への回答を依頼し、全員の協力が得られた。講義・実習に対して、各データベースに関して内容が充分であるかを尋ね、不十分の場合には理由の記入を求めた。

その結果の分析から、受講者の本実習に対する評価と、次年度の本実習では改善するべきであると考えられる問題点が見出された(図3)。

これらの問題点を基に、改善するべきポイント(図4)を押さえて、2004年度の本実習を企画した。次項で詳細を述べる。

2.2 改善のポイント

2004年度は、受講環境といった物理的な側面のみならず、講義・実習の内容に関しても「文献検索技術の習得」という目的に対する効果を高めることができるよう、内容の改善をも目指した。前項で述べたように、2003年度の受講者を対象とした質問紙の分析と、受講者や協力者から得た意見・感想を元に、改善するべきポイントを設定した。ポイントは図4のとおりであるが、それぞれについて、以下に詳述する。

(1) 受講環境の改善

2002年度までは、多人数が同時にPCを使用できる環境が鶴舞キャンパスにはなかったため、医学部分館の利用者用のPCを使用して実習を行っていたが、台数が十分ではなく、数名に1台の割

り当てであった。しかし、本実習を効果的に実施するためには各受講者が一台ずつPCを操作できることが望ましいため、2003年度は、本実習の一部を新設されたサテライトラボで実施した。その結果、前半は大講義室での講義、後半はサテライトラボでの講義および実習となった。サテライトラボではプロジェクタが使用できない(現在は使用可能である)等のハンディがある状況での実施であったが、2002年度にも本実習を担当した図書館員から、講義と実習を必要に応じて切り替えることのできるサテライトラボの方が受講者の反応が良く、教授もしやすいとの感想が得られた。また、受講者を対象とした質問紙においても、全行程をサテライトラボで実施してほしいとの記述が見られた。これらのことから、2004年度は全行程をサテライトラボで実施することとした。

なお、2003年度まではデータベースの操作方法の図示を含めた詳細な資料を作成し、それを元に講義・実習を行っていた。2004年度は、プロジェクタが使用可能になったため、講義にはMS PowerPointを使用した。必要に応じてデータベースの操作マニュアルなどを参考文献として挙げ、詳細な資料の作成は割愛した。実習にあたっては、講師の操作手順をプロジェクタでスクリーンに投影し、受講者全員で共有することが可能となった。

(2) 各受講者のレベルに合わせた例題の提示

2003年度までは、受講者の研究テーマに関連する文献の検索を行わせて、それに対して助言を行っていた。しかし、文献検索の初心者から、何を検索してよいのかわからないので例題が欲しいとの感想があった。また、質問紙の結果から、同じ内容でも「難しすぎる」「易しすぎる」という感想が混在し、受講者のレベルが多様であることが判明した。さらに、各受講者が本実習で習得すべき到達点を明らかにするためにも、2004年度からは、難易度の異なる例題を複数作成し、演習として行わせることにした。

(3) PubMedの重点化

学外からも利用できる、検索のプラットフォームが馴染みやすい等の理由でPubMedの需要が高いことを考慮し、OVID MEDLINEよりも講義・実習の時間を長く取ることとした。

(4) 情報検索理論の教授

2003年度までは、講義内容がデータベースごと

の検索技法に偏り勝ちであった。しかし、情報検索理論を知ることにより、自己の検索行動を論理的に把握することが可能となる。検索技法と組み合わせることで習得することによる効果が期待されることから、基礎的な情報検索理論についても講義で扱うこととした。また、検索の技術的な側面においても、例えば、MeSH (Medical Subject Headings: 医学件名標目表) の使い方だけでなく、その意義にも留意して講義を行った。

また、「短期間では習得が困難である (OVID EBMR、OVID MEDLINE)」との感想に答えるために、それぞれのデータベースの特徴について、判り易く解説するように努めた。特に、そのデータベースがどのような場面で有効であるか、という点を強調した。「研究に必要ではないため興味が持てない (OVID EBMR、OVID MEDLINE、医中誌 WEB)」との感想に対しては、いずれそのデータベースが必要になった時に想起され役立つように、どのような文献の検索に有効であるのかを丁寧に解説した。

以上で示した改善のポイントを応用した2004年度の実施状況については、次項で述べる。

3. 2004年度の実施状況

実習は、午後2回の出席が必要である。これは、大学設置基準による0.5単位分の必要時間を確保するためと、受講者に医療従事者が多く、午前中は診察等で出席不能な場合が多いことに配慮したためである。

2004年度は183名の受講希望があった。実習内容の性質から、可能であれば全員が受講できるこ

◆一日目：6月14日 (月)、16日 (水)、17日 (木) ・文献の検索について (概要の説明) ・医中誌 WEB ・OVID MEDLINE
◆二日目：6月21日 (月)、23日 (水)、24日 (木) ・OVID EBMR (Evidence Based Medicine Reviews) ・一次資料の入手方法 (OPAC、電子ジャーナル、図書館の使い方等)
※いずれも午後のみ開講 ※単位の認定には、一日目、二日目にそれぞれ一回ずつ、合計二回の出席と、レポートの提出が必要である。

図5 2004年度の講義・実習内容

とが望ましく、例年、可能な限り全員の履修登録を認めている。しかし、サテライトラボは他の講義や自習にも利用されており、本実習が使用できる日数が限られている。また、実習中も日常の業務は普段通りにこなしているため、受講者が増加するにつれて協力者の負担が過大になる傾向にある。これらの事情を考慮し、他の講義・実習の担当教員と調整した結果、6月中旬から下旬にかけて6日間を確保することができた。サテライトラボの収容人数が最大52名であり、各受講者は午後2回の出席が必要であることから、2004年度の履修登録者の上限は156名として、抽選を行った。

2004年度の講義・実習の内容は、図5のとおりである。主なデータベースは、医中誌 WEB、OVID MEDLINE、OVID EBMR、PubMed の4件であり、2003年度より変更されていない。2003年度に、関連するデータベースとして言及された Journal Citation Index は、別途セミナーを実施することとして、2004年度では割愛した。

いずれも、データベースの特徴や検索手順、効果的な検索方法を講義した後に、例題に沿って簡単な実習を行った。

なお、本実習には115名が出席し、105名が実習の終了後にレポートを提出し、その評価により104名の単位が認定された。

4. 2004年度の質問紙の集計結果

レポートの提出時に質問紙 (【付録】を参照) の提出を求めたところ、本実習に出席し、レポートを提出した105名のうち、104名が提出した (回収率99.0%)。

なお、質問紙の主要な項目は2003年度と同様である。ただし、本実習の内容の充分・不十分につ

表1 [質問1] 回答者の内訳 (n=104)

課程	年次	回答者	単位取得者
修士	1	15	13
	2	0	0
	小計	15	13
博士	1	53	58
	2	26	26
	3	5	6
	4	1	1
	小計	85	91
(回答なし)		4	—
合計		104	104

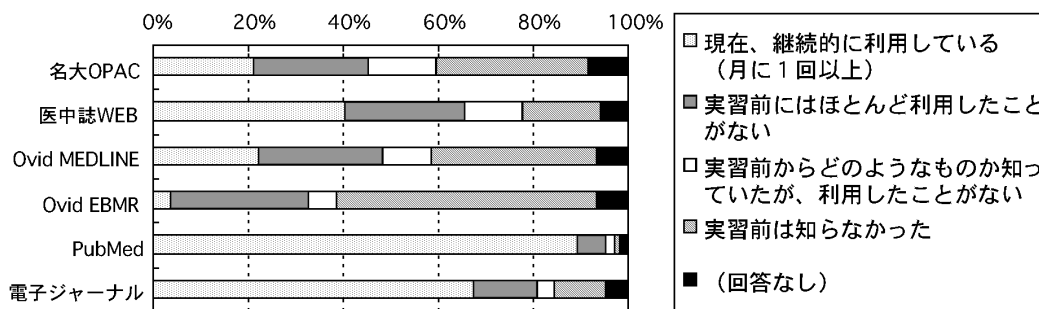


図6 [質問2] 実習前の各データベースの利用状況 (n = 104)

表2 [質問3] 実習以前の図書館の利用状況 (n = 104)

項目	回答者(人数)	割合(%)
ほぼ毎日利用している	2	1.9
週に1-2日利用している	18	17.3
月に1-2日利用している	50	48.1
ほとんど利用したことがない	27	26.0
一度も利用したことがない	6	5.8
(回答なし)	1	1.0
合計	104	100.0

(a) - (c) の質問紙による調査結果について、年度別に比較する

- (a) 実習に対する満足度
- (b) データベースをさらに利用したいと考えた受講者の割合
- (c) レポートに使用されたデータベースの割合

図7 本実習における改善の効果の検証

表3 [質問4、5] 本実習に対する満足度 (n = 104, %)

データベース名	項目	実習の内容は充分である	該当するデータベースをさらに利用したいと思う
名大OPAC		92.3	92.3
電子ジャーナル		93.3	96.2
医中誌WEB		94.2	86.5
OVID MEDLINE		91.3	87.5
OVID EBMR		88.5	86.5
PubMed		86.5	95.2

いて尋ねた項目については、2003年度は講義・実習のふたつに分けて尋ねているが、2004年度では分けていない。そのため、両者の比較に際しては、その点に留意した。

回答者の内訳は、表1のとおりである。回答者と単位取得者の数値に齟齬が見られるが、これは回答ミスによるものと推測される。

質問2では、実習の対象となったデータベースを実習以前にどの程度使用したことがあるかを尋ねた(図6)。2003年度と比較して、「月に1回以上、継続して使用している」という回答については、OVID MEDLINE と OVID EBMR は減少しているが、医中誌 WEB と PubMed は増加しているのが特徴的である(2003年度のグラフについては、本誌の第2号¹⁾を参照)。

表2は、質問3で受講前に図書館をどの程度利

用したことがあるかを尋ねた結果を集計したものである。67.3%が継続的(一ヶ月に1回以上)に利用していると回答している。

表3は、質問4「実習の内容は充分でしたか」と質問5「実習を受けて、データベースをもっと利用しようと思いましたが」で「はい」と回答した割合を示したものである。いずれの満足度も高いことがわかる。

「実習の内容が十分ではない」との回答には、理由の記述を求めた。それによると、PubMedでは「よくわからなかった/内容が難しかった」という趣旨の記述が多く、それ以外では、「普段利用しないデータベースで戸惑った」「多機能なデータベースを習得できなかった」「講義に比して実習の時間が短い」との感想が多く見られた。

また、「該当するデータベースをさらに利用したいと思わない」理由としては、OVID MEDLINEは「PubMedで十分である」との理由が多く、それ以外のデータベースでは「必要がないので使用しない」との理由が多く見られた。

5. 改善の効果の検証

2003年度と2004年度の質問紙の結果を比較することにより、改善の目的が達成されたのか、その効果を検証したい。

検証のポイントは図7のとおりである。

(a)、(b)においては、満足度や「さらに利用したい」と回答した受講者の割合を比較することにより、昨年度よりも割合が高くなっていれば、改善の効果があつたと判断することができ、図4で示した2004年度の改善のポイントである(1)受講環境の改善、(2)各受講者のレベルに合わせた例題の提示、の効果を測ることができる。また、データベースごとに捉えることによって、(3)PubMedの重点化、の効果を検討することができる。

(4) 情報検索理論の教授、については、その効果を推し量ることは困難であるが、本実習の満足度にその影響が含まれていると考えることもできる。

(c)においては、改善の効果とは方向性が異なるが、図4で示した(3)PubMedの重点化、の影響が見られることが予測された。

なお、受講者の構成は、2003年度は修士課程23名、博士課程98名、2004年度は修士課程15名、博士課程89名であった。このことから、修士課程・博士課程の在籍者について、両年度間の構成比に有意差はない($\chi^2=0.838$, $df=1$, $p>0.05$)。

(a) 実習に対する満足度

実習に対する満足度を年度別に比較した。ただし、片方の年度にのみ登場するデータベースに関しては、比較ができないため割愛した。

実習に対する満足度は、2003年度では講義と実習のふたつに分けて尋ねている。しかし、2004年度は講義と実習の区別がなく、本実習全体として評価しているため、2003年度のそれぞれと、2004年度の全体と、2回に分けて比較することとした。

2003年度(講義のみ)との比較では、電子ジャーナル、医中誌WEB、OVID EBMRが僅かにポイントを上げている他は、満足度が若干ではあるが、下降している(表4)。中でも、PubMedは有意差がある。

一方で、表5から、2004年度が2003年度(講義のみ)の満足度を下回るデータベースはないことがわかる。しかし、いずれにおいても有意差は見られないことから、効果があつたとも言えない。

(b) データベースをさらに利用しようと考えた受講者の割合

前項と同様に、2004年度が2003年度の満足度を下回るデータベースはないが、有意差はなく、効

表4 実習の満足度：2003年度(講義のみ)と2004年度の比較(%)

データベース \ 年度	2003 (n=120)	2004 (n=104)	
名大 OPAC	98.3	96.0	$\chi^2=1.142$, $p>0.05$
電子ジャーナル	95.9	97.0	$\chi^2=0.201$, $p>0.05$
医中誌 WEB	96.7	97.0	$\chi^2=0.020$, $p>0.05$
OVID MEDLINE	94.2	94.1	$\chi^2=0.002$, $p>0.05$
OVID EBMR	90.9	92.0	$\chi^2=0.083$, $p>0.05$
PubMed	96.7	90.0	$\chi^2=4.135$, $p<0.05$

※いずれも $df=1$ ※※無回答を除いて集計

表5 実習の満足度：2003年度(実習のみ)と2004年度の比較(%)

データベース \ 年度	2003 (n=120)	2004 (n=104)	
名大 OPAC	95.9	96.0	$\chi^2=0.002$, $p>0.05$
電子ジャーナル	93.4	97.0	$\chi^2=1.510$, $p>0.05$
医中誌 WEB	93.4	97.0	$\chi^2=1.550$, $p>0.05$
OVID MEDLINE	90.9	94.1	$\chi^2=0.773$, $p>0.05$
OVID EBMR	84.3	92.0	$\chi^2=3.029$, $p>0.05$
PubMed	93.4	90.0	$\chi^2=0.840$, $p>0.05$

※いずれも $df=1$ ※※無回答を除いて集計

表6 [質問4] 実習を受けて、データベースをもっと利用しようと思った受講者の比較(%)

データベース \ 年度	2003 (n=120)	2004 (n=104)	
名大 OPAC	95.0	95.0	$\chi^2=0.000$, $p>0.05$
電子ジャーナル	95.0	99.0	$\chi^2=2.839$, $p>0.05$
医中誌 WEB	88.4	89.1	$\chi^2=0.025$, $p>0.05$
OVID MEDLINE	90.9	91.0	$\chi^2=0.001$, $p>0.05$
OVID EBMR	86.8	90.9	$\chi^2=0.923$, $p>0.05$
PubMed	95.9	98.0	$\chi^2=0.835$, $p>0.05$

※いずれも $df=1$ ※※無回答を除いて集計

表7 レポート作成に使用されたデータベース(%)

データベース \ 年度	2003 (n=120, 回答数151)	2004 (n=105, 回答数105)
医中誌 WEB	15.2	3.8
医中誌 WEB デモ版	4.0	0.0
PubMed	58.3	77.1
OVID MEDLINE	21.2	18.1
OVID EBMR	1.3	1.0
合計	100.0	100.0

果があつたとも言えない。

(c) レポートに使用されたデータベースの割合

表7は、レポートの作成に使用されたデータベースを集計したものである。

PubMedが増加し、他のデータベースは減少し

ていることがわかる。ただし、2003年度は複数のデータベースを用いた受講者がいたため複数回答となっているが、2004は重複が見られなかった。このことから、単純に PubMed の講義・実習時間を増加させたからであると結論付けることはできないが、ひとつの傾向として捉えることは可能である。

6. 考察

2003年度における講義の満足度は90.9%から98.3%、実習では84.3%から95.9%であり、全体的に満足度は高い。

一方、2004年度においては90.0%から97.0%であり、2003年度に比べて、データベース間の格差は縮小されている。その理由は定かではないが、講義と実習を切り離さずに実施したことと関係があるのかもしれない。

なお、比重を高くした PubMed の評価が他のデータベースに比べて芳しくなかった理由としては、例題の難易度が全体的に高かったことが考えられる。PubMed を日常的に使用している受講者が多いことから、2003年度の質問紙では、高度な検索技術の講義を期待していたとの感想が多く見られたが、2004年度は逆転する結果となった。

2003年度の質問紙の結果から、様々なレベルの受講者への対応を目指した。しかし、依然として「難しかった」と「易すぎた」という感想が混在しており、対応の難しさを実感した。

この件については、受講者のレベル別にクラスを分けることも考えられるが、サテライトラボの使用状況やクラス分けの方法などを考慮すると、現時点では得策とはいえない。小テストを実施して、各自の習得の度合いを測る方が現実的である。

医中誌 WEB と OVID EBMR については、受講者の研究には必要ないので興味がないとの感想が多く、また OVID MEDLINE については、学外からも利用できる PubMed の方が便利である、との感想が多く見られた。この傾向は、2003年度と同様であることから、引き続き検討すべき課題である。

今回は、2003年度の受講者の希望を入れる形で PubMed に重点を置いたが、本来は、講師が教授すべきであると判断することと、受講者の希望とは区別して検討されるべきであることから、こ

れもまた今後の課題である。

前述のように、利用者の満足度は高いものであることから、百分率の多少の上下についてはそれ程に意味のあることは考えられない。また本稿では、質問紙調査結果の分析により、本実習の評価と前年度との比較による改善の試みの評価を行っている。しかし、それはあくまでも受講者の満足度に依存した評価である。受講者の満足度とは別に、何らかの客観的な指標による評価もまた、必要であると考えられる。

本実習の数値的な評価は、2003年度に始めて行われた¹⁾。2年が経過し、受講環境を安定させることに成功したことから、今後は「2.1 本実習の問題点と改善のプロセス」でも述べたように、絶対的な到達目標や客観的な評価を併用することも必要であると考えられる。小テストを実施して、習得状況を受講者各自が確認することも可能であり、今後の課題である。

また、本実習の終了後に、複数の受講者から文献検索と、研究への応用に関する相談を受けた。そこには、実習中には認識されなかった、終了後に改めて気付かされる事項がしばしば含まれており、実習後のフィードバックの重要性を再認識する結果となった。

短期の集中講義であることと、受講者には多忙な社会人院生が多いことから、受講後にフィードバックを得る機会が少ないように思われるが、それは、受講者にとっても同様であることが推測される。このことから、受講後にも何らかの形で受講者と対話し、支援する仕組みを検討する必要があると考えられる。

すなわち、本実習を受講して、終了時に文献検索技術が習得できていることは必要なことであるが、終了後、研究に応用して役立つものでなくてはならないからである。

7. 図書館員による情報リテラシー教育

図書館員による情報リテラシー教育には多くの事例が存在するが、その在り方は様々である。対象となる利用者の所属や、館種によってもその内容は異なると考えられる。

本実習においては、大学院重点化により博士後期課程の募集人数が増加したことや、博士前期課程の新設に伴い、受講者希望者は増加し続けてい

る。あらゆる研究分野においてそうであるように、医学においても先行研究の調査は欠かせないものであり、発表される論文数が年々増加する現在では、情報リテラシー教育としての本実習の重要性が減じることはない。しかし、インターネット上のコンテンツから手軽に情報を入手し（PubMedが好まれる理由はまさしくそこにある）、研究室にいながらにして電子ジャーナルで多くの論文を読むことのできる環境において、古典的で厳密な文献検索の技術を理解し、身につけることの重要性を説くことは益々難しくなるだろう。また、医学教育のあり方も変化していることから、教員ではない図書館員が、いかにして柔軟に対応して行くのかという問題もある。

OCLC (Online Computer Library Center)²⁾ は、大規模なデジタルレファレンスサービスである QuestionPoint³⁾ と大学のコース管理システムとを連携させる e-learning の試験運用を行っている。第一段階では、オンラインコースのホームページに QuestionPoint へのリンクを行ったところ、効率よく適切な資料を見つけ出すことができる、と学生の反応は肯定的であり、教員からも、学生の作業効率がよくなったと好評であった⁴⁾。第二段階では、10機関の教員の協力により one-click で図書館とレファレンス図書館員にアクセスできるサービスが提供され、利用者からの反応は肯定的であった⁵⁾。また、利用者が図書館を再評価する機会にもなると期待されており、試験運用は現在も継続されている⁴⁾。この事例は、図書館が e-learning を通して直接的に情報リテラシー教育を担うことの有効性を示唆している。

ヒーリー⁶⁾ が指摘するように、インターネット上のコンテンツの発達に伴い、利用者の情報要求も変化している。

図書館員による情報リテラシー教育においては、図書館という古い慣習を引き摺りがちなシステムにおいて、いかに現代のニーズに適合したサービスを提供できるのか、という点が重要になるのかもしれない。

生物学に「赤の女王仮説」という仮説がある。「ある生物種をとりまく生物的環境は、その環境の構成に加わる他種の進化的変化などによって平均的にたえず悪化しており、したがってその種も持続的に進化していなければ絶滅に至るという仮

説⁷⁾」である。「L. Carroll の童話『鏡の国のアリス』に登場する赤の女王の『同じ場所に留まるためには、力の限り走らねばならぬ』という言葉にちなむ⁷⁾』とされている。要するに、周囲の変化に対応できなければ時代遅れになり、容赦なく淘汰されるという考え方である。これは、一般社会に関しても同様ではないだろうか。社会変化に適応できない図書館と図書館員は、生き残ることができないのではないだろうか（尤も、隔絶された環境において、進化の必要がない場合もある）。

8. まとめ

2004年度の本実習は、2003年度の質問紙調査の分析結果から、やや漠然としたきらいがあるにせよ、受講者のニーズの反映を中心とした具体的な目標を挙げて、改善することを目指した。その結果、ある程度の効果が確認された。本来、次年度へのフィードバックは不可欠なものであるが、それが困難な背景には、3年前後という図書館員の頻繁な異動により、必要とされる知識が蓄積されにくく、長期に渡る計画を立てにくいという状況が挙げられる。

例えば、2004年度の協力者は3名であるが（【注】を参照）、附属図書館医学部分館に着任したのは、1名は2004年4月、2名は2003年4月である。

本実習では、文献の検索、即ち二次情報データベースの検索という狭い範囲を扱っている。しかし、その実践に必要な知識・技量は、決して狭く少ないものではない。

本誌の第2号¹⁾ で言及したように、医学部分館の図書館員による本実習への協力は、相当の志を持って開始された。これまでの協力者達は、医学系図書館での短い職務経験と少人数での担当という困難な状況であるにも関わらず、最大限の努力を傾けてきた。そしてこれからの協力者たちも、惜しみなく努力し続けるであろう。

【謝辞】

実習への協力にあたりお世話になりました、本実習の責任者である名古屋大学附属図書館医学部分館長の山内一信教授に感謝いたします。

また、質問紙にご記入いただいた受講者各位に感謝いたします。

【注】

- 1) 2004年度の協力者と担当領域は次のとおりである。
 - ・岡本正貴（情報サービス掛長）：概論、医中誌 WEB、二次資料情報に基づいた一次資料の入手方法、協力者の総括
 - ・鈴木康生（情報管理掛長）：PubMed
 - ・安井裕美子（情報サービス掛員）：OVID MEDLINE、OVID EBMR

【引用文献】

- 1) 安井裕美子. 図書館員による情報リテラシー教育支援：医学部分館の取り組み. 名古屋大学附属図書館研究年報. no. 2, 2003, p.25-30.
- 2) OCLC. (online), available from <<http://www.oclc.org/>>, (accessed 2005-1-23).
- 3) QuestionPoint. (online), available from <<http://www.oclc.org/questionpoint/default.htm>><<http://www.oclc.org/questionpoint/default.htm>>, (accessed 2005-1-23).

- 4) OCLC. "OCLC links virtual reference, course management software and libraries". OCLC Abstracts. vol. 7, no. 16. (online), available from <<http://www5.oclc.org/downloads/design/abstracts/04192004/questionpoint.htm>>, (accessed 2005-1-23).
 - 5) OCLC. "OCLC continues to bring virtual reference, course management software and libraries together". OCLC Abstracts. vol. 7, no. 39. (online), available from <<http://www5.oclc.org/downloads/design/abstracts/09272004/index.htm>>, (accessed 2005-1-23).
 - 6) ヒーラー, レイ・ワトソン. 進化するコンテンツ利用者—新しいタイプの利用者の役に立つために図書館はどのように変化すべきか. 情報管理. vol. 47, no. 9, 2004, p.579-592.
 - 7) 八杉龍一ほか編. “a 赤の女王仮説”. 岩波生物学事典. 東京, 岩波書店, 1996, p.4. (ISBN 4-00-080087-6)
- ※有性生殖に関する仮説にも同じ名称の仮説が存在する.